

[2023年度 口語詩句年度奨学生 総評]

高橋修宏

昨年の「口語詩句賞」と同じように、月間の佳作に選出された中から自選十篇を一組とした作品

。とりわけ、「口語詩句賞」では順位をつけるということに難渋させられましたが、今回の「奨学生」選考は入選か否かというシンプルな基準であったため、その作者に秘められた可能性を想いながら、より自由に開かれた気持ちで向き合うことができました。

やはり念頭にあったのは、〈口語〉という日常の言葉を用いて、どこまで言葉を超えた何ものか（コトバ）を現前させているか。そして、一回性としか呼びよめないポエジーとの出会いに、作者も、また私も立ち会うことができるか、ということであったように思います。

そのため、自選十篇において、しばしば目にする自己模倣の傾向については、少なからず気になってしまったことを記しておきます。

また、一篇ごとには優れていても、十篇まとまると、どこか弱く感じてしまう作品がある一方で、一篇では瑕瑾が目につくものの、十篇となると俄然、その作品たちが印象的に立ち上がってくるような経験をしたことも、ここに記しておきたいです。

もとより、これまで記したことは、私自身の創作や批評行為においても、つねに心掛けているポイントが含まれています。けっして選者としての目線だけでなく、同じ創作を志す者の一人として、たえず自省さえも感じながら選考に当たれたことは、今回の収穫でありました。ありがとうございます。

今回、「奨学生」に選ばれた方にも、惜しくも選ばれなかった方にも、心よりお礼とエールを贈ります。けっして自由ではない言葉を用いて、たえず自らを壊しながら、そして創りながら、おたがい共に前に進んでいきましょう。

\*

以下、高橋が〈入選〉とした中から一篇ずつ引くことで、今回の責に代えたいと思います。

清水将也（21歳・北海道）

誰しものが街の一部でありながら  
誰を欠いても成立する街

中矢 温（23歳・東京都）

青空やアブラカダブラ  
タブラ・ラサ

高田皓輔（18歳・千葉県）

銃撃戦が繰り広げられ  
味噌汁があったまる

白野実悠（21歳・新潟県）

もう何も言うことなく海のほう  
ばかり見ていた 海ではなく

奥村俊哉（23歳・宮城県）  
バファリンの表にBが彫られ冬

杉原健吾（22歳・神奈川県）  
169センチ62キログラム  
実物大の孤独

篠遠早紀（24歳・東京都）  
歩き疲れて  
真夜中のクリスマスチキン

渡邊早紀（20歳・山口県）  
浜辺には異国の煙草が落ちていて  
少年少女が捨てる故郷

塩田きよら（22歳・東京都）  
無精卵みたいな言葉を吐きながら  
カウンセラーは窓ばかり見た

郡司和斗（24歳・茨城県）  
ガチャのカプセルには  
母の模型が入っていて  
午後から雨だと教えてくれる

渡邊美愛（18歳・愛知県）  
好きだとは言えない  
距離に落ち着いて  
手持ち花火を見つめるばかり

松下誠一（20歳・東京都）  
プレス機に  
焼かれるタコの音のよう  
僕を名付けたひとの寝息は

藤野日向子（22歳・愛媛県）  
水にさえ致死量があり枯れ野原

小笠原風花（24歳・奈良県）  
母が母にならない道もあったのだ

母になる前の母には会えない